

桜蔭俳話会 十月句会(第三〇九回) 鑑賞文

【秀句鑑賞】

雲竜の駆ける天井そぞろ寒

明美

書院の天上に雲竜図が描かれていた。ただそれだけの事実と肌寒さを増しつつある秋の深まりを取り合わせた作品である。何時の日か円覚寺を訪れ、雲竜図を見上げたときに、雲竜が今にも走り出そうとしているかのような勢いのある筆致に感銘したのであろう。「雲竜の駆ける天井」としたのは、単なる事実の報告ではなく、まぎれもない作者の主観の表白なのである。

文語的表現によれば、「駆ける」は「駆くる」となるのであろうか。

【秀句鑑賞】

蘇生治療終へし大樹の天高し

ツル子

長い歴史のある鎌倉の古刹には名木古木が随所に見られる。しかし、樹勢の衰えが目につくものもある。園丁や樹木医の懸命な努力と的確な処置によって、一本の大樹が往時の勢いを取り戻しつつある。大樹の復活を寿ぐように空はどこまでも高く青く澄んでいた。

「大樹の天高し」は「大樹や天高し」にすることもできる。また「天高し」と叙景的に言う代わりに「秋高し」と内省的に言うこともできる。

【秀句鑑賞】

隧道のみ跡深しそぞろ寒

友子

北鎌倉駅を左側に出て線路沿いの裏道を通ったとき小さな隧道に出会った。昔人が幾多の苦勞の末に開通させた手ぼりの隧道である。歴然とした内面補修の工事跡はほとんどなく、昔日の労苦を偲ばせる鑿跡が深く残っていた。「のみ跡」と「そぞろ寒」との配合が微妙に効いている。

【自句自解】

歲月の水の蒼さよ寺の秋

守

古刹を訪れた時、池に目を向けることが多い。周囲がよく手入れされ、人工的な挟雑物を取り除かれた池の蒼い水面に見入るとき、その古刹と古刹のある地域を巡る長い歴史の重さを感じることがある。戦乱の血にまみれたかも知れない池の水は、変わらぬ青を保って旅人を迎えてくれるのである。

【秀句鑑賞】

洞門の鑿跡まろし秋澄めり

ヤエ子

前々句の隧道を洞門として捉えたものである。この作者は鑿跡が風化によって丸みを帯びていることに注目したのである。同じものを見ても感じ方は人それぞれである。長い歴史を象徴的に表現するとすれば、「まろし」の言葉の選択は成功している。白褐色の岩肌の鑿跡と秋澄むとの配合が効いている。

【秀句鑑賞】

黄梅院の垣に溢れん式部の実

幸

「黄梅院」という固有名詞の選択が上手い。作者が目にしてるのは垣に溢れんばかりの式部の実であるが、気がつけばその寺は「黄梅」の名木を誇り、名前にそれを読み込んだ寺であった。季節は異なるが、黄梅と紫式部を並べていることに仄かな諧謔性があつて面白い。

【自句自解】

これよりの円覚寺領からすうり

守

洞門を抜け椎大樹の神社と石の三猿の地蔵群を経て、円覚寺の塔頭が散在する山城に入った。そのとき、同行者より「あつ、烏瓜！」の声。見つけ出した烏瓜の実は、ひと雨着が来そうな空に燦然と輝いていた。円覚寺とは関係ないらしき民家もあったが、この烏瓜によって結界ができ、いよいよ円覚寺領に足を踏み入れるのだということ強く意識した。

【秀句鑑賞】

杜鵑草総員退避の細き道

ヤエ子

横須賀線沿いの細い裏道の向こう側に小型バンが止まっていた。われわれ一行が通り過ぎるのを待っていたようである。このとき同行者の発した「総員退避」の声にしたがい、裏道から線路に降りる通路に全員が出て、道を明けた。やり過ぎしたバンの荷台には梯子・脚立が載っていた。裏道沿いの顧客に向かう植木職の車であつたらしい。

吟行の途中で同行者や無関係な通行人が漏らす言葉には、吟行に關係する重要な情報やヒントが含まれていることが多い。作者は鋭敏なセンスによつてその言葉を拾い上げて、一句をなし成功したのである。

【自句自解】

鑿跡の小さき洞門・虚栗

みなしくり

守

前記の洞門を過ぎて裏道に交差する別の洞門を潜り抜けたところに、実が剥きとられた栗の毬が落ちていた。虚栗とは、殻ばかりで実のない栗のことであるから、前記の栗の毬は本来的に虚栗（実無し栗）のものではない。自動車の通れる道が別に作られ、今は散歩する者だけが気ままに通るだけとなつてしまった、打ち棄てられたようなこの洞門を振り返ったとき、虚栗ということばが自然に湧いてきてしまった。

【秀句鑑賞】

秋日浴ぶ石の観音深き黙

明美

石造りにせよ木造りにせよ観音は黙つて衆生を見守っている。静謐な境内を歩いている者は次第に沈黙し、それぞれの来し方に思いが至る。この深き黙は、観音の黙であると同時にわれわれの黙でもある。日ごろの忙

しい日常から束の間離れ、しずかに内省する場として古寺が多くの人によって選ばれているのかも知れない。

【自句自解】

山門の梁の亀裂や秋の風

守

円覚寺の堅固な木組みに多くの罅や亀裂があるのを見た。精緻に設計されて頑丈に造られている筈のものがいとも簡単に破壊されてしまった厳然たる事実を突き付けられると、「確かなもの」とは一体なにかと戸惑う。人間の営為は本当に小さいものである。

このような思いとは関係なく、秋の風が境内に吹き渡る。

【秀句鑑賞】

上皇の御真筆とや秋の声

幸

「伝上皇筆」とでもあったのであろうか、「とや」の言葉使いが巧みである。作者は上皇の御真筆と素直に受け止めたのであろうか、あるいは御真筆にいささかの疑義を感じたのであろうか。この「とや」によって作者の受け止め方が良く出ている。ゆるやかな遊び心の一句である。

【秀句鑑賞】

しやれ文字でならいどころと紅葉かな 真三

前記の裏道の吟行途中に、洒落た書体で「てならいどころ」と書いた看板に出会った。華道、茶道、舞踊、絵画などの想定が同行者によって行われたが、「てならい」とあることから、素直に手習い書道であろうという事になった。西洋流に言えば、まさにレタリングの妙を凝らしたものであった。

作者が、「洒落た文字」と言わないで「しやれ文字」と表記したこと自体も洒落ている。吟行ならではの出会い頭の秀句である。

【秀句鑑賞】

山門の木組み確かや小鳥来る

友子

円覚寺の山門の壮大さはかつ目に価する。作者の視線はその豪壮な木組みの有りに注がれる。木組みの確かさは、禅宗に帰依した鎌倉武士の思いを投影する。打ち続く戦乱を収束させ、宗教に裏打ちされた規律ある平和な時代を築き、それを持続したいとの願いである。山門の堅固な木組みの存在と、小鳥来るとの配合が良い。

【秀句鑑賞】

街守る石の三猿石路の花

ヤエ子

三猿をはじめとする石の地蔵群は町を守っているのだ、という日本人の普遍的な信仰心のあらわれ。信仰心と言っても、厳密な意味での宗教的信仰心ではない。土着的な素朴な心の持ち様である。これがあるからこそ、日本人としての一体感が生まれ、かろうじて最低限の結束が保たれているのかも知れない。「石」のリフレイ

ンが効いている。

(文責… 代表 増田 守)

「事務局より」

◎ 秋季通信句会を実施します。同封のはがきで作品をお送りください。

・ 締切り 十一月十日 (土)

・ 句数 秋に属する季語を用いた三句